In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	大学史資料室第 24 回展示(2011 年 8 月~2012 年 6 月)：モダニズムの学舎と建築家・伊藤正文 ： 大阪市立大学昭和初期学舎群
Author	大阪市立大学大学史資料室
Citation	大阪市立大学史紀要. 5 巻, p.127-132.
Issue Date	2012-10
ISSN	1884-3522
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学史資料室
Description	
DOI	10.24544/ocu.20171208-035

Placed on: Osaka City University

Osaka Metropolitan University

≪展示記録≫

大学史資料室第 24 回展示
(2011 年 8 月～ 2012 年 6 月)

モダニズムの学舎と建築家・伊藤正文

―大阪市立大学昭和初期学舎群―

大学史資料室の第 24 回展示は、「モダニズムの学舎と建築家・伊藤正文」と題し、本学の 1 号館を始めとする昭和初期に建設された学舎について、「モダニズム」という建築様式と、その学舎の設計にあたった建築家・伊藤正文という人物に焦点をあわせて、展示を行った。大学史資料室では、過去の第 17 回展示（2002 年 11 月～ 2004 年 4 月）で、「学舎の記憶―建築で辿る大阪市立大学の歴史―」という建物関係の展示を行ったことがあるが、昭和初期のモダニズムというような建築様式や、伊藤正文という建築家に注目した展示は初めてである。

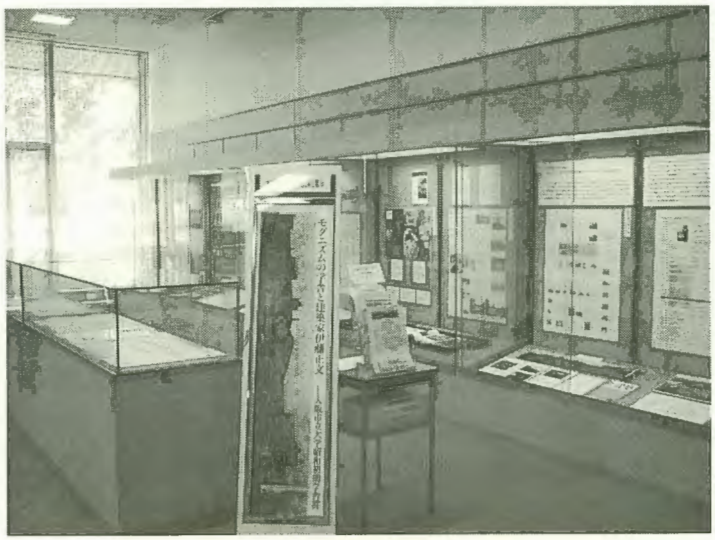
趣　意　書

白いシンプルな箱とリズムよく並ぶ窓や柱型。昭和初期のモダニズム建築の特徴をよく示す学舎群が大阪市立大学のキャンパスにはあります。それぞれ白い外壁を持ち、シンプルな形態ながら、量感のある円形のベランダや規則的に並ぶ窓などが目を惹きます。これらの建物は昭和 8（1933）年から 9（1934）年にかけて、旧大阪商科大学の新しい学舎として建築されたもので、装飾を排除した合理的な形態からは、新しい時代の建築をつくろうという意気込みが感じられます。一方、立面構成は左右対称をしているものが多く、大学としての象徴を古典的に表す部分も共存しています。

現在のキャンパスで使われている建物は、1 号館、2 号館、第 1 体育館、旧図書館、旧第 1 書庫の 5 棟とポルティコ状の渡り廊下です。旧図書館は、この秋に学生サポートセンターとして生まれ変わる予定です。これらに加えて、3 号館が建っていたのですが、現全学共通教育棟に建替えられ、こちらは現存していません。これらの校舎群は 2001 年に『関西モダニズム建築 20 選』(芦屋市立美術博物館) のひとつとして収録され、1 号館は、2002 年に国の登録有形文化財に登録されています。

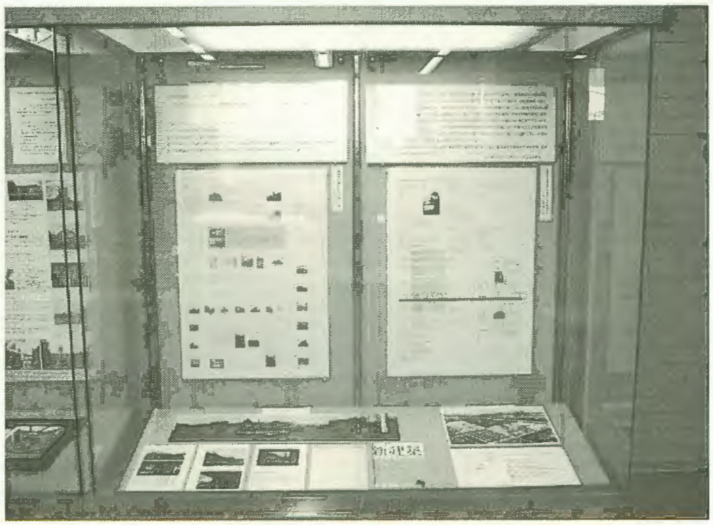
本展示は、昭和初期に建築されたモダニズムの学舎 5 棟とその設計を担当した建築家・伊藤正文に焦点を当てています。5 棟の建物の設計は大阪市建築課が担当し、その主任技師が伊藤正文でした。後年、伊藤正文は大阪市立大学家政学部の初代教授を勤めるなど、大阪市立大学と縁の深い人物です。普段は使う立場から学舎として見ている建物ですが、本展示がその建築としての歴史とデザインに触れる機会になればうれしく思います。

平成 23（2011）年 8 月
大学史資料室



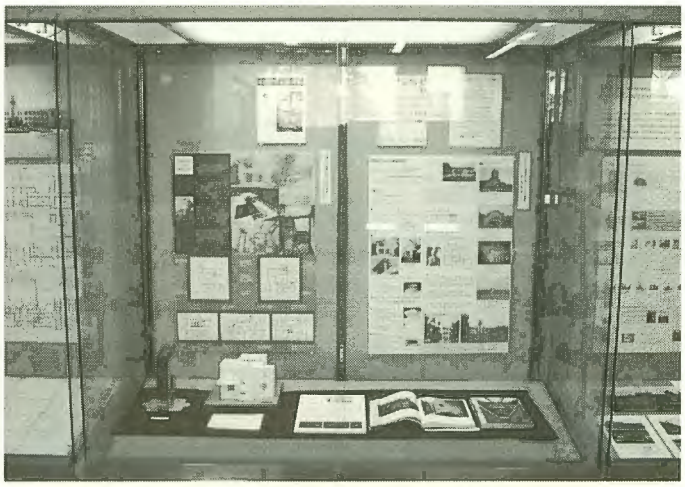
会場の全体写真

壁面第1ケース



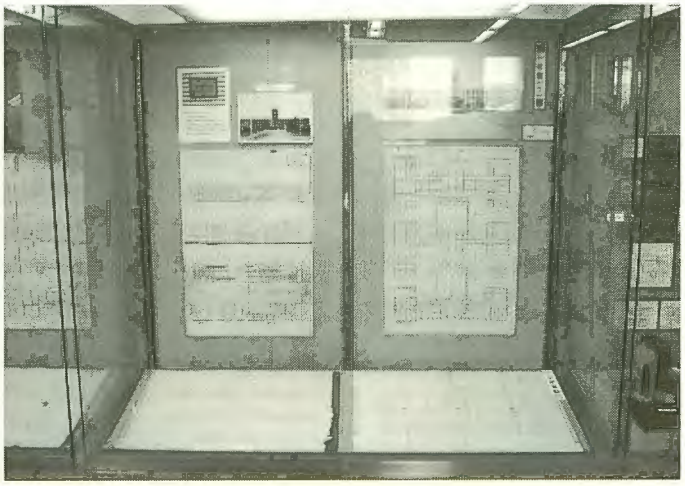
壁面第1ケースは、伊藤正文・日本インターナショナル建築会・大阪市立大学の歩みを並行的に示した年表、伊藤正文を取り巻く相関図（関連する人物や建築作品）、伊藤が設計した大阪市立大学学舎（旧大阪商科大学）が紹介されている雑誌誌面（『新建築』第9巻第4号、1933年4月）などを展示した。

壁面第２ケース



壁面第２ケースは、伊藤正文の建築理念を、当時組織されていた日本インターナショナル建築会の活動を中心に紹介し、伊藤の作品の具体例として、夙川の住宅建築について、雑誌に紹介された建物の写真や設計図面、それらに基づいて、生活科学部小池研究室で作成した建物模型を展示した。また、『関西モダニズム建築 20 選』（芦屋市立美術博物館監修、淡交社、2001 年）に紹介された本学学舎の記事ページも展示した。左端に展示している書籍は、伊藤正文の著作『建築保健工学』で、伊藤による建築保健工学の研究成果である。

壁面第３ケース

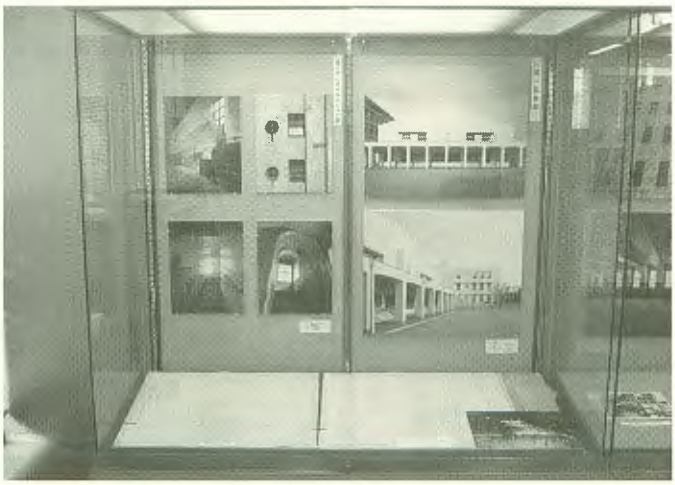


壁面第３ケースは、本学１号館の設計図面、現在と竣工当時の写真、１号館の「登録有形文化財」銘板の写真などを展示した。これらの設計図は、現在も建物管理に活用されている「現役」の資料であり、原板から青焼きコピーをつくって展示した。青焼きコピーとは、トレーシングペーパーに描かれた図面（原図）と印画紙を重ね合わせて露光させるコピー方法で、青色に発色するために青焼きと呼ばれている。コピーの際に原図と印画紙を重ね合わせるために歪みが少なく精度がいい。低価格で大判の図面を複写できるなどの特徴があり、建設現場でよく使われている。

壁面第４ケース

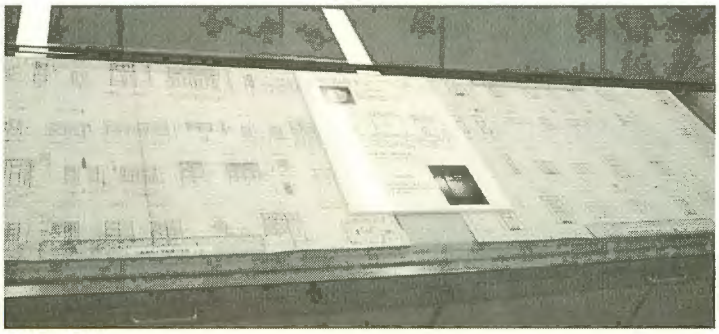
壁面第４ケースは、１号館の内部に見られる、さまざまに工夫された意匠を持つ建物構成要素のうち、１号館の階段天井部の採光窓、階段側面の採光用の大きな丸窓の、設計図と写真、図書館の旧１号書庫の外観と内部の写真などを展示した。旧１号書庫は、図書が一杯に詰まった書棚の保存という目的から、書棚の重量に耐えうるべく、書棚の配置場所の天井にコンクリートの梁、通路部分に採光用の窓を配置するという工夫がなされている。

壁面第５ケース



壁面第５ケースは、第１体育館の現在の外観写真、内部天井部分の設計図面と現在の写真を展示した。体育館の天井は、柱のない広大な空間を覆う屋根を支えるために鉄骨構造が工夫されていることが、設計図面とともに理解できる。左側の写真４点は、学舎群の部分である。外観のシンプルさとは裏腹に、独自に工夫された意匠が顕著な建物の構成部分のいくつかを、現在の写真で紹介した。

移動式第１ケース



移動式第１ケースは、さまざまな窓の設計図面と、その一部の現在写真である。前述のように、設計者は、教室の出入り口や採光用の窓にかなり神経を使っていたことがわかる。

移動式第２ケース

移動式第２ケースは、大阪商科大学新学舎竣工記念絵はがき（拡大）、昭和10年11月「大阪商科大学要覧」から「平面図」を展示した。現在の運動グラウンドの部分に大きなため池があったことがわかる。

以上のように、大学史資料室の第24回展示では、昭和初期モダニズム建築である大阪市立大学の学舎群とその建築家、伊藤正文についての展示を行った。今回は、青焼きの図面と竣工当時の写真、そして新たに撮り下ろした写真、伊藤正文にまつわる資料で展示を構成した。

新たな写真は、正面性のある学舎群の造形を迫力たっぷりに写すとともに、細部の意匠にも迫っている。例えば、書庫の量感のある構造体の向こうから射すように入ってくる光や、１号館の階段で上昇する人の動きに合わせて降り注ぐ光などを捉えている。写真家の市川靖史氏の撮影によるものである。

また、体育館については、構造家である辻英一氏の所見を得ることができた。辻氏によると、体育館の構造は、「現代の構造技術と比較しても遜色のない、高品質で堅固な梁として構築されている」という。

普段は大半の人が何気なく学舎群を使っている。しかし、その建物の背景には、当時の時代の最先端をいく取り組みがあった。その造形は、新しい時代の日本に相応しいデザインを模索した結果であり、設計はそのような思想を日本中に広めようとした「日本インターナショナル建築会」のメンバーによって手掛けられた。今回の展示が、シンプルな学舎群の造形の裏側にあるデザイン上の模索や葛藤について伝えることができて、学生の好奇心を掻き立てる一助になればと願っている。

（付記）今回の展示は、大学史資料室運営委員の生活科学研究科准教授小池志保子が、企画の全般を担当した。展示パネルや年表の製作には、生活科学部の森田美紀、大谷実菜、椋本友恵、和田涼、山瀬龍一が協力した。